

## 第7章 掘り棒から踏み鋤へ： 農具に関する民族考古学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008941">https://doi.org/10.15021/00008941</a>

## 第7章 掘り棒から踏み鋤へ —農具に関する民族考古学的研究—



インカ時代の伝統を受け継ぐ踏み鋤によるジャガイモの植え付け（ペルー・クスコ・チンチェーロ）

## 1 はじめに

前章で、踏み鋤がマルカパタでの農作業で中心的な役割を果たしていることを述べた。この踏み鋤を私がアンデスではじめて見たのは、今から40年あまり前の1968年、ボリビア領のティティカカ湖畔でのことであった。そのとき、大変驚いた記憶が今も残っている。その農具がインカ時代のものとほとんど変わらないものであったからだ。インカ時代の踏み鋤については、クロニスタのワマン・ボマの絵などでもその形態や利用方法を知ることができる(図7-1) [Guamán Poma 1980 (1613)]。そして、彼の絵で私もいくつかの農具の存在を知っていたが、その絵に描かれていた踏み鋤が、インカ滅亡から数百年を経た現代でも使われているとは思っていなかったのである。

もちろん、農具にもヨーロッパ人の影響がなかったわけではない。ヨーロッパ人の到来まで、畜力を使った農具はアンデスではまったく知られていなかったが、そこに牛にひかせた犁がヨーロッパに人よって導入されたのである。1550年頃のことだ。その光景は現地の住民に大きな驚きを与えたようで、インカ・ガルシラーソも次のように述べている。

「ウシが土地をすき返すというのは前代未聞の珍事だったので、それを見物するために、あちこちからインディオが押しかけたが、(中略)動物が畑仕事をするなどというのは、インディオたちにとって、そして私自身にとってもあきれ返るような光景であって、人びとは口ぐちに、怠惰なスペイン人は楽をしようとして、本来なら自分たちですべき仕事を、ああした大きな動物に押しつけているのだ、と言っていた」。[インカ・ガルシラーソ 1986 (1609): 452]



図7-1 踏み鋤によるジャガイモの植え付け  
[Guamán Poma 1980 (1613)]

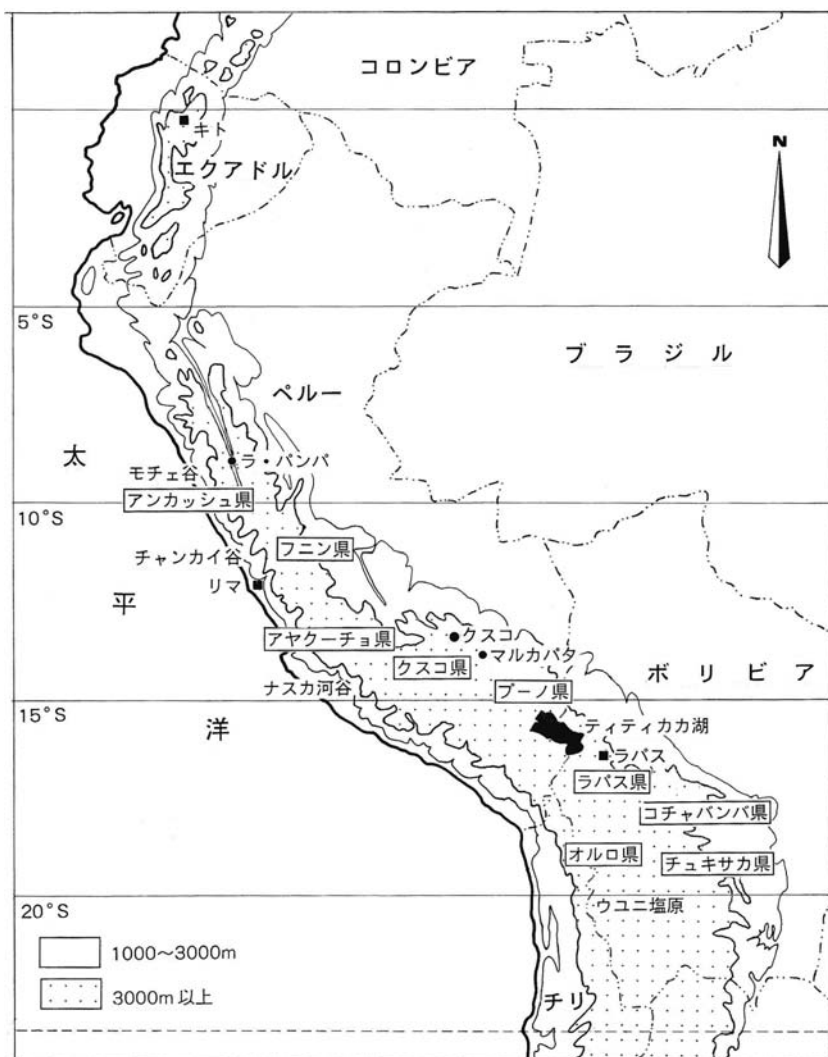


図7-2 アンデス地域と本章で扱う主要な地点

現在、この畜力を使った犁はアンデス高地で広く使われているが、アンデス伝統の農具もまた消えることなく使われている。その代表的な農具こそが、ここで扱おうとする踏み鋤なのである。

この踏み鋤は、アンデスで一般にチャキタクヤ (*chaquitactaclla*) または単にタクヤ (*taclla*) と呼ばれるもので、第7章扉写真に見られるように一本の木の棒に足をのせるための横木と鋤を操作するための握り、そして先端部に鉄製の刃先をつけた道具である。インカ時代の踏み鋤と違う点は、先端部に鉄製の刃先がつけくわえられたことだけである。

その後も踏み鋤に関心を持ち、調査をつづけてきた結果、中央アンデスの高地部では

現在でも依然としてインカ以来の伝統をもつ踏み鋤が使われ、しかもそれが農作業の中心的な役割を果たしていることがわかった。一方で、中央アンデス高地部を離れると、この踏み鋤は姿を消すことも明らかになった。

さて、この踏み鋤は、ヨーロッパ人によって侵略される前のアメリカ大陸では最も発達した農具であったとされる [Gade and Rios 1972]。それでは、なぜ中央アンデスで踏み鋤のような農具が発達したのだろうか。また、インカ以来の伝統をもつ踏み鋤が今も依然として使われているのだろうか。また、なぜ踏み鋤の使用が中央アンデス高地部だけに限定されているのだろうか。本章は、このような問題をとおして、中央アンデスにおける農耕文化の特色を明らかにしようとする。図7-2は本章で扱う主な地点である。なお、本章で取り上げる農具の大半は私が収集し、国立民族学博物館およびリトルワールド博物館に収蔵されているため、図中に収蔵地とともに標本番号（Hは国立民族学博物館、Sはリトルワールド博物館）も付記しておく。

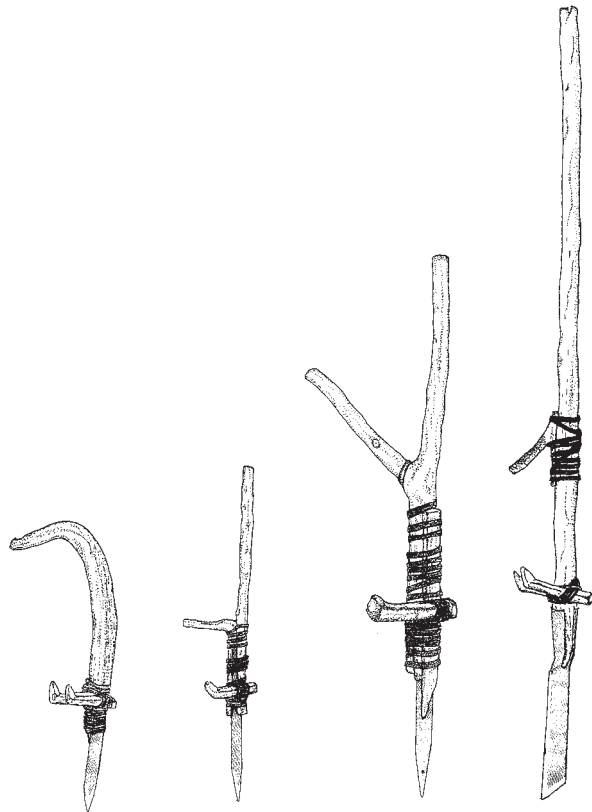
## 2 踏み鋤の形態と構造

まず、中央アンデス高地の踏み鋤とはどのような農具なのか、それを形態や構造をとおして少し詳しく見ておこう。図7-3は中央アンデスで見られる主だった踏み鋤である。このように踏み鋤には地方的な変異があるので、はじめに私が長期に滞在したペルーのクスコ県マルカパタ村の踏み鋤を例にとり、その形態と構造を紹介しておこう。先述したようにマルカパタはアンデスの東斜面に位置しているため、村びとの大半が世帯レベルで大きな高度差を利用してリヤマやアルパカの家畜飼育とともにジャガイモとトウモロコシを主作物とする農業もおこなって自給を維持している地域である。

さて、マルカパタの踏み鋤は図7-4であるが、基本的に、次の4つの部分からできている。すなわち、木製の柄、この柄にほぼ直角につけられた足掛け、柄をささえるための握り、および先端部の鉄製の刃先である。

カルサドル (calzador) と呼ばれる柄の部分は、使用する人の身長にあわせて作られる。このため、マルカパタ村でも踏み鋤の長さは様々であるが、ふつう1m前後で、直径は4~5cmほど、材料はキシワルと呼ばれる硬い木である。この柄の下端部に付けられている2本の横木の部分はタキルポ (*taquillpo*) と呼ばれ、片足が乗せられるだけの幅 (約20cm) がある。タキルポのすぐ上に付けられている握りはクモ (*kumo*) (マンゴ) と呼ばれる。タキルポもクモも、リヤマやアルパカの皮ヒモで柄にしっかりとつけられている。

コーナ (*gorana*) と呼ばれる刃先は幅が6cmあまり、全長が34cmある。この材料はトラックなどのスプリングを再利用したもので、これだけは市場などで購入する。残りの部分はすべてマルカパタで材料を手にいれ、自分でつくる。この刃先に車のスプリ



ボリビア・ラパス地方 ペルー・プーノ地方 ボリビア・ラパス地方 ペルー・フニン地方  
 図7-3 中央アンデスの主な踏み鋤

ングを使うようになったのは1930年代からといわれており [Rivero Luque 1987], 踏み鋤に鉄製の刃先がつけられたのは最近のようである。先のワマン・ボマの図でもうかがえるように、インカ時代の踏み鋤は木だけでつくられていたようだ。最後のインカ皇女とスペイン人貴族とのあいだに生まれたインカ・ガルシラーソは踏み鋤について、次のような記録を残しているのである。

「彼らは長さ一尋ほどの棒を鋤として用いた。全面が平で裏側は丸くなっているこの鋤の幅は、指幅四つほどであった。そして、一方の先端を、土にささるように尖らせ、先端から半バーラ（1バーラは約83.6cm）のところ、2本の小さな棒切れをしっかりと縛りつけて、足掛けとした。インディオたちはそこに足を掛け、激しい勢いで力いっぱい鋤を打ち込むのである」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 385]<sup>1)</sup>

私自身はまだ見る機会をえていないが、現在でも地域によっては鉄製の刃先をつけず、木製の柄の先端部を尖らせただけの踏み鋤もあるらしい [Rivero Luque 1987]。とにか

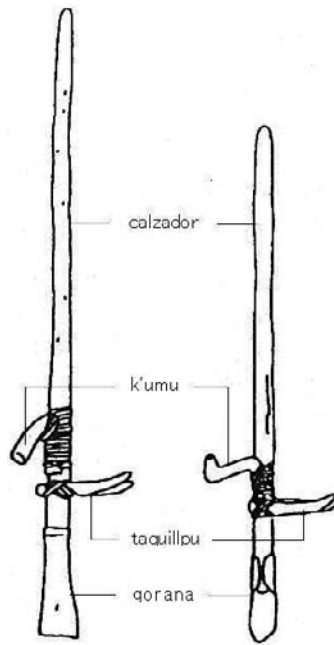


図7-4 マルカパタの踏み鋤



写真7-1 小型の踏み鋤（ポリビア・コチャバンバ地方）

く、中央アンデス全体でみた場合、現在は鉄製の刃先をつけた踏み鋤が一般的である。鉄製の刃先をもった踏み鋤のほうが耐久性もあり、使いやすいためであろう。

次に、踏み鋤の地方的な変異についても見ておこう。先の図7-3でも見られるよう



に、踏み鋤には大きさの点でかなりの変異が見られる。最も大きな踏み鋤では2mを超すものもあり、小さいものでは1m足らずのものまである。また、写真7-1に示したものはこれまで見たなかで最も小さいもので全長が50cmほどしかない。

先に、マルカパタでは踏み鋤の大きさは使用者の身長にあわせてつくられると述べたが、図に見られるような極端に大きいものや小さいものはない。つまり、踏み鋤の大きさは地域によってほぼ決まっているのである。おおまかにいってペルーの中部地方では大型の踏み鋤が見られるのに対し、ペルー南部からボリビアにかけての地域では小型の踏み鋤が見られる。その理由としては使用される耕地の土壌の質や傾斜の程度などが考えられるが、この点に関する資料は残念ながら得ていない。

踏み鋤には、構造のうえでの変異も見られる<sup>2)</sup>。マルカパタの踏み鋤は四つの部分から構成されていると述べたが、地域によってはそうでないものもある。図7-3の左端がそれで、この踏み鋤はクモと呼ばれる握りの部分を欠いている。ただし、このタイプの踏み鋤はふつう柄の部分が極端に湾曲しており、この部分がクモのかわりに握りの機能をはたしている(写真7-2)。

このような違いのせいから、このタイプの踏み鋤は、チャキタクヤとは呼ばれず、ウイソまたはウイリと呼ばれている。チャキタクヤのなかには、その部分名称にウイソまたはウイリをもつものがあることから、基本的には同一起源のものと考えてよいだろう。

ここで踏み鋤とともに、しばしば使われる農具の手鋤と土砕きについても紹介しておこう。手鋤は、ペルーでもボリビアでも、ラウカーナ (*raucana*) またはリウカーナの名前で知られる。その構造は図7-5に示したように曲がった木を利用して、先端部に鉄製の刃をソケット状にはめこんだものである。この刃の大きさなどに若干の変異はある

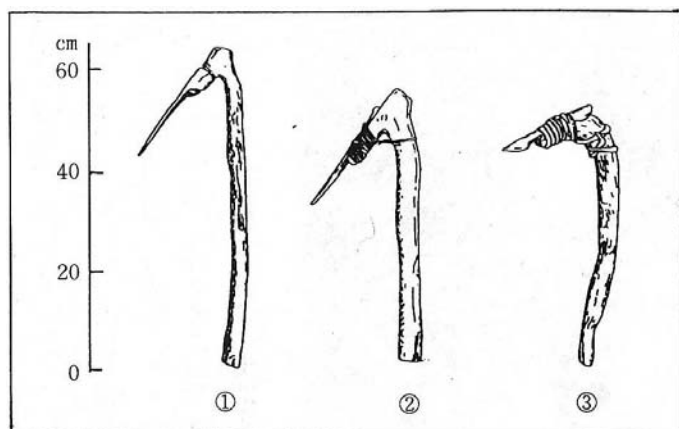


図7-5 中央アンデスの主な手鋤

①ペルー・プーノ県 [H 12926]

②ペルー・クスコ県 (マルカパタ村) [S-43-182]

③ボリビア・ラパス県 [H 109773]





写真7-2 握りの部分を欠いた踏み鋤（ペルー・カラ  
イバンバ地方）



写真7-3 手鋤のラウカーナを使ってのトウモロ  
コシの播種（ペルー・マルカパタ地方）

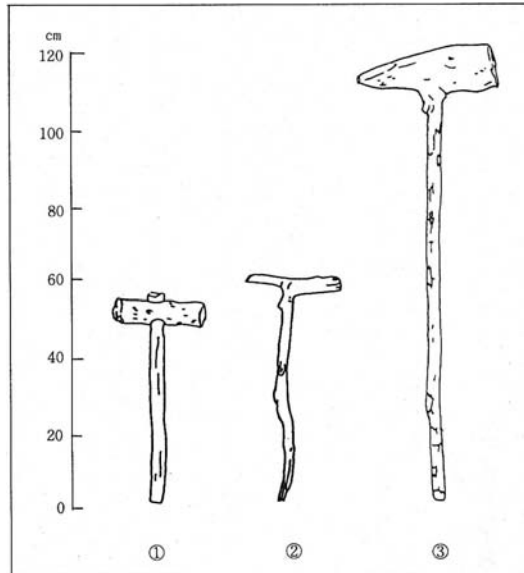


図7-6 中央アンデスの主な土砕き

- ①および②ペルー・プーノ県 [H 12929, H 12928]
- ③エクアドル・イバラ郡 [H 13025]

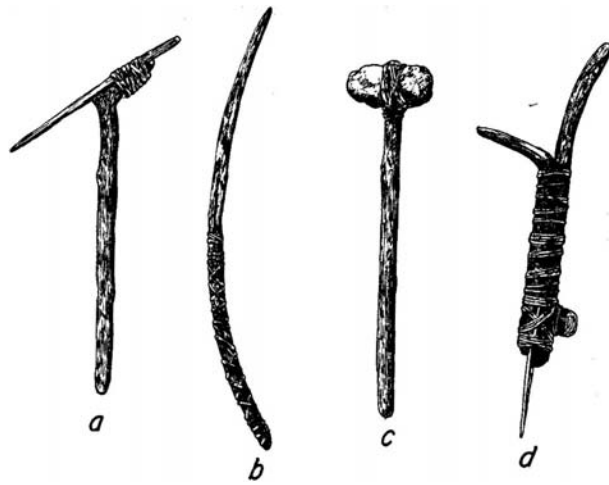


図7-7 アイマラ族の主要な農具 [Tschopik 1946]  
a: 手鋤 b: 脱穀用の棒 c: 土砕き d: 踏み鋤

ものの、基本的な構造はかわらない。また、使用法もどこでも変わらず、トウモロコシの播種やジャガイモの収穫のほか、踏み鋤を使うときの補助用の農具とされる点でも共通している（写真7-3）。これはインカ時代も同じであったらしく、ワマン・ポーマもそのような絵を描いている。

一般にクパーニャ (*k'upaña*) と呼ばれる土砕きは、きわめてシンプルな構造をしている。しばしば、図7-6で見られるように長さが50~120cmの1本の木でできている。様々な大きさがあるが、基本構造は同じである。とにかく、この土砕きおよび手鋤も、ワマン・ポーマの図でも見られるように踏み鋤と同様にインカ時代から今日にいたるまで使われてきたアンデス伝統の農具であると考えられる。

図7-7は、ボリビア領の高原地帯に住むアイマラ族の主な農具であるが、これによっても踏み鋤、手鋤、土砕きが主要な農具になっていることがわかる [Tschopik 1946]。この図によれば、当時、土砕きの先端部には石がつけられ、この部分で土を砕いていたとされるが、これが書かれたのは1946年以前のことであり、現在はもう見られない可能性がある。なお、bは脱穀用の棒であり、主としてムギ類の脱穀に使われる。ただし、ムギ類はヨーロッパから導入されたものであることから、この農具は伝統的なものではなく、先述したマルカパタ村でも知られていない。

### 3 踏み鋤の使用法

次に踏み鋤の使用法について述べよう。これも、マルカパタ村での観察例を中心に報告する。マルカパタでは平坦な耕地がほとんどなく、踏み鋤も斜面に位置した耕地で使



写真7-4 マルカパタの踏み鋤

われる。踏み鋤の使用法は、横木に足をのせ、握りの部分に手をあてがって、全体重が鋤の先端にかかるように斜めに土中につきさす。このとき、体重が踏み鋤に十分にかかるように、山側から谷側にむかって飛び降りるようにする。次に、両手で太い木の棒の先端部をつかんで、これを手前に引きさげ、テコの原理を利用して、土を掘りおこす。そして、谷側から山側に直線状に後退しながら耕起してゆくのである。

実際の農作業で最もよく使用される場面は耕地の耕起作業である。マルカパタでは現在なお牛にひかせる犁は知られていないが、平坦な耕地のあるクスコ盆地やティティカカ湖畔などでは、牛にひかせた犁がしばしば使われる。一方、アンデス高地に多い急な傾斜地や幅のせまい階段耕地などでは踏み鋤の使用が一般的である。

この耕起では、しばしば男女がそれぞれ数人ずつでチームをつくって作業をする(写真7-4)。男性が横一列になって踏み鋤を使って耕起し、女性はそれに向かいあって、おこされた土の塊を槌で砕くのである。この槌が先に紹介したクパーニャである。槌のかわりに、これも紹介した手鋤のラウカーナを使ったり、素手で砕くこともある。インカ・ガルシラーソも、先の文章につづけて次のように述べている。

「彼らは親族、あるいは隣人同士で七人から八人の組をなして作業を行い、全員一緒になってひとつのことにあたるので、それを見た者でなければとうてい信じられないような、巨大な芝生の塊も平気で掘り起こしてしまう。女たちは男衆の反対側から、素手で芝生の塊を掘り起こすのを手伝い、雑草の根を引き抜く。そうすることによって、雑草が枯れ、後になって除草の手間が省けるようにするためである」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 385]

耕起について、よく見られるのはジャガイモの植え付けのときである。アンデスでの主作物はトウモロコシとジャガイモであるが、一般にトウモロコシの播種作業には手鋤のラウカーナが使われ、ジャガイモをはじめとするイモ類の植え付けには踏み鋤が使わ

れる。このジャガイモの植え付けでは、しばしば3人で作業がおこなわれる。すなわち、男性が踏み鋤で耕地に穴をあけ、そこに女性が種イモをほうりこみ、もう1人がこの種イモに肥料を与える（写真7-扉）。これはインカ時代も同じであったらしく、先に示したワマン・ポーアの絵でも3人でジャガイモの植え付けをする光景が描かれている。

このようにジャガイモとトウモロコシで植え付けの農具が異なるのは耕地の性質の違いによるようである。というのも、ふつうトウモロコシは連作されるため、その耕地は鋤でも掘りおこすことができるのに対し、ジャガイモ耕地は1年栽培すると数年間は休閑させるため、この休閑地には雑草が生え、きわめて固くなっていて、鋤ではとても歯がたたないのである。

とくに、長期間にわたって休閑された耕地はきわめて固く、踏み鋤でさえ耕起できないことがある。このようなときは雨季があける前の土壌が水分を含んで柔らかくなっているときに踏み鋤を使って耕起する。おそらく、先のインカ・ガルシラーソの記述もこの雨季の耕起作業についてのものであろう。雨季に耕起作業をし、雑草を引きぬいて、それを乾季のあいだに枯死させることは現在も見られるからである。

なお、ジャガイモ耕地にはときどきマシュアが混植されるが、このイモの植え付けにも踏み鋤が使われる。さらに、オカやオユコなどのイモ類の植え付けにも、やはり踏み鋤が使われる。なお、ポーアの絵ではジャガイモの収穫のときにも踏み鋤が使われているが、このような方法を私自身は目にしたことがなく、ふつう鋤のラウカーナが使われる。また、ジャガイモ耕作では植え付け後、適当な時期に排水のため畝立てをおこなうが、このときも踏み鋤が不可欠な道具となる。この作業では、耕地がたとえ平坦なところに位置していても、しばしば踏み鋤が使われる。

また、踏み鋤はタルウイと呼ばれるマメの播種のほか、トウモロコシの播種でも使われるらしい。このように、踏み鋤の使用はイモ類栽培に限定されるわけではない。しかし、イモ類栽培では踏み鋤を不可欠にしている場合が少なくなく、踏み鋤の使用はイモ類の栽培、とくに、ジャガイモの栽培と密接な関係があるように思われる。

## 4 踏み鋤の分布

先に述べたように踏み鋤が見られるのは中央アンデス高地だけであるが、これをもう少し詳しく検討してみよう。踏み鋤がふつうに見られ、またそれを不可欠な農具として利用しているのはティティカカ湖畔を中心とする中央アンデスの南部高地である。これまで見たかぎりではペルーのクスコ県、プーノ県、ボリビアのラパス県などでは、どこでもといっても過言でないくらいに踏み鋤は見られる。これは私の観察によるものであるが、これらの地域が踏み鋤の最も重要になっている地域であることを地理学者のGadeたちも指摘している [Gade and Rios 1972: 4]。

しかし、私の観察や得た情報によれば、ペルーの中部ではフニン県やアンカッシュ県までは見られるが、これより北では踏み鋤は見られなくなる。一方、ボリビアではコチャパンバ県で見られたほか、チュキサカ県でも使用されているとの情報がある。しかし、これよりも南になるとやはり踏み鋤は見られなくなる。つまり、踏み鋤の分布はペルーの中部地域からボリビアの中部あたりまでの地域に限定されるのである。この踏み鋤の分布域は何を意味するのであろうか。というのも、ジャガイモの栽培地域はアンデスのほぼ全域におよぶのに、踏み鋤の分布はその一部でしかないからである。それでは、先に指摘したジャガイモ栽培と踏み鋤は密接な関係にあると述べたのは正しくないのか。

たしかに、踏み鋤の使用はジャガイモ栽培と直接に関係しているわけではなさそうだ。踏み鋤の使用は、直接にジャガイモ栽培に関係しているわけではなく、ジャガイモの休閒と密接な関係がありそうである。先述したように、踏み鋤が最も効果を発揮するのは長期に休閒したジャガイモ耕地を耕作するときである。そして、踏み鋤が使われているのはまさしくジャガイモ栽培で休閒システムをとっているところなのである。ジャガイモ栽培のために休閒システムをとっている地域は、中央アンデスの高地部に限定されるからである [Orlove and Godoy 1986]。

この休閒システムがいつから始まったのかは不明であるが、先に指摘したようにインカ・ガルシラーソの記録によれば遅くともインカ期にはあったようだ。また、この休閒システムは、ジャガイモの安定的な栽培のために大きな役割を果たしていることが知られている [山本 1988]。休閒は地力の劣化を防ぐだけでなく、ネマトーダ（線虫）などによる病気の発生をおさえる効果をもつからである。一方で、先に指摘したように休閒された耕地はきわめて固くなり、そこでの耕起は踏み鋤以外の農具では難しい。これらのことから、踏み鋤が使用されているのはジャガイモ栽培地域のなかでも、とくにジャガイモを重要な作物として、その安定的な栽培のために休閒システムをとっている地域であると考えられる。

ところで、この踏み鋤の分布はインカ時代においてもほぼ同じであったようだ。図7-8は、Donkinによって描かれた1500年頃の主要な農具の分布であるが、この図によれば踏み鋤の使用はその頃もやはり中央アンデスに限定されていたとされる [Donkin 1970]<sup>3)</sup>。一方、手鋤は中央アンデスだけでなく、アンデス全域で広く使われていた。そして、ペルーの海岸地帯から北部アンデス、そしてメソアメリカでは金属製の刃先をもった掘り棒が使われていたとされる。

この図には当時のジャガイモ栽培の分布域も示されているが、これから当時もジャガイモの栽培地域すべてで、必ずしも踏み鋤が使われていたわけではないことがわかる。すなわち、北の方ではエクアドルやコロンビア、そして南の方ではチリやアルゼンチンなどの地域ではジャガイモを栽培しながら、踏み鋤を欠いていたのである<sup>4)</sup>。

おそらく、当時も、これらの地域では休閒システムはおこなわれていなかったのでは



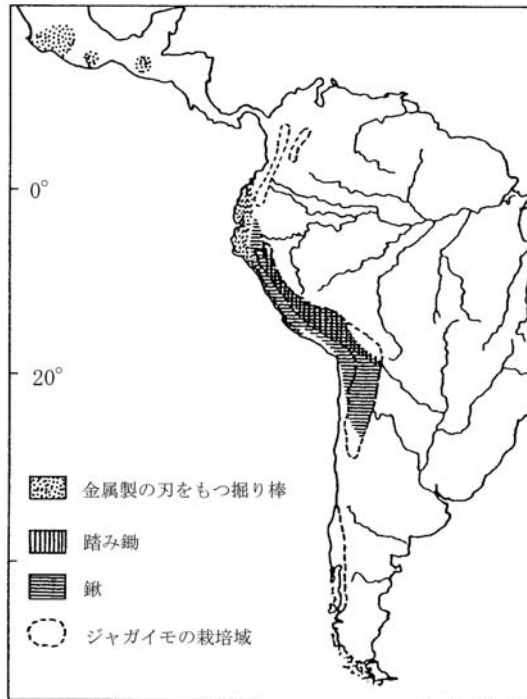


図7-8 1500年頃の南アメリカ大陸の主要な農具の分布  
[Donkin 1970] より

ないかと考えられる。そのことは、これらの地域ではジャガイモが栽培されていたとしても、その重要性は中央アンデスにおけるほど大きくはなかった可能性があることを示唆している。実際に踏み鋤が使われていない地域では、アンデス高地でもジャガイモ栽培の重要性はあまり大きくなく、イモ類以外の栽培植物を主作物にしているようである。それを次に検討してみることにしよう。

## 5 掘棒と鋤

踏み鋤の分布に関して、もうひとつの特徴的な点は高地部だけで見られることである。中央アンデスでは、どこでも踏み鋤が見られると先に述べたが、これは高地部にかぎってのことであり、低地部では見られない。Gadeらも、踏み鋤は標高3500m以上の高地でしか見られないと述べている [Gade and Rios 1972]。それでは、中央アンデスの低地部ではどのような農具が使われているのだろうか。

たとえば、マルカパタの近くに位置するケロはきわめて伝統的な文化を維持している村として知られるが、そこでも踏み鋤の使用は高地部にかぎられ、低地部にあるトウモロコシ耕地での播種には図7-9のような掘り棒が使われている。

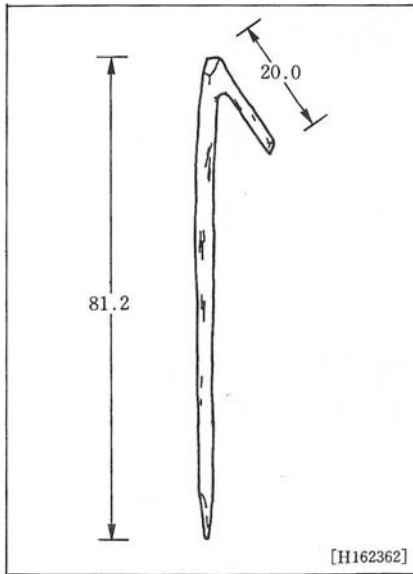


図7-9 ケロ村（ペルー・クスコ県）の掘り棒



写真7-5 掘り棒状の鋤（ペルー・ラ・パンパ地方）

また、ペルー中部、アンカッシュ県のラ・パンパ地方でも掘り棒状の農具が使われている。ラ・パンパは標高2000m ならずの温暖な気候のところ、そこでの主作物はトウモロコシである。そして、このトウモロコシの播種のとき、写真7-5のような農具が使われる。これは1本の棒の先端部に少し幅をもった鉄製の刃をつけたもので、掘り棒と鋤の中間タイプと見ることもできる。これを垂直につきたてて穴をあけ、そこにトウモロコシの種子をほうりこんでゆく。

じつは、このような掘り棒あるいは鋤のような農具はアンデス高地部でも使われている。ただし、それは踏み鋤が見られない地域にかぎられる。たとえば、南のほうでは、ボリビア中部のチバヤ族がそうである。彼らはボリビアとチリの国境近く、ウユニ塩原に近い標高4000m 前後のきわめて乾燥した高地で、農業と牧畜で生計をたてている民族である。そして、ジャガイモも栽培しているが、彼らは踏み鋤をもたず、図7-10の①および②のようなタキサと呼ばれる鋤を使っている。

その理由としては、そこでの主作物が雑穀のキヌアであることに求められそうである。調査期間が短いため詳細は不明であるが、チバヤ族の人びとによればジャガイモの重要性はあまり大きくなく、副次的に栽培している程度であるといわれる。さて、この鋤は図に示したように、木の棒の先端に鉄製の小さな刃をつけたものである。使用法は、鋤を垂直に持ち上げて、地面に突き刺して穴をあけ、そこにキヌアの種子をまく<sup>5)</sup>。

この使用法から見ると、この農具は鋤ではなく、掘り棒であるとも考えることもできる。



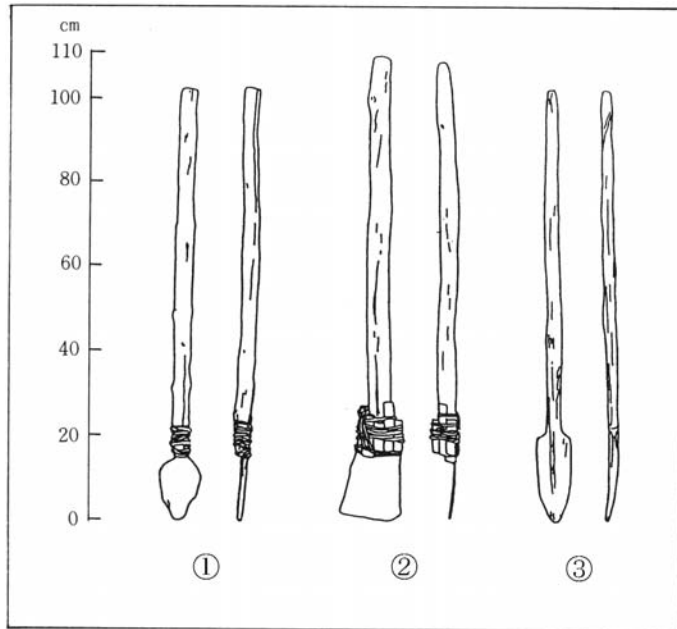


図7-10 チパヤ族（ボリビア）とオタバロ族（エクアドル）の鋤  
 ①および②ボリビア・オルロ県アタワルパ郡 [H 110431, H 110430]  
 ③エクアドル・イバラ郡（リンコナーダ村）[H 113024]

しかし、写真7-6に見られるように、鋤の刃の上部にしばしば足をのせて体重をかける、つまり踏み鋤のような使い方もする。この点から見れば、チパヤ族の鋤は掘り棒と踏み鋤の中間タイプと見ることもできる。

しかし、この鋤では深く土地を掘りさげることにはできない。このため、彼らは深く土地を耕起する必要があるときは写真のような鋤を使う（写真7-7）。この鋤に対するチパヤ語による呼称はなく、スペイン語でアサドン（azadón）と呼ばれる。このタイプの鋤はスペイン起源のものであり、アンデス本来のものではない。踏み鋤を欠いていることなどから見ても、チパヤ族ではもともと深く掘る農具はなかったのかもしれない。

北のほうでは、エクアドルの首都、キト周辺の標高3000m前後の高地に居住するオタバロ族もそうである。彼らはトウモロコシや、ジャガイモ、麦類などを栽培するかたわら、ヒツジ飼育もおこなっている。そして、この農作業で中心になる農具がグアショと呼ばれる鋤なのである。この鋤は図7-10-③に見られるように1本の木で作られているが、基本的にはチパヤ族の鋤と同じものである（写真7-8）。また、エクアドルの高地部では、北部のキト周辺のみでなく、南部のクエンカ地方でも同じタイプの鋤が使われている。ただし、現在ではふつう鋤の先端部には鉄製の刃先がつけられている。

なお、オタバロ族のあいだでも、先のチパヤ族と同じようにスペイン起源の鋤が使われている。オタバロ族のあいだでもジャガイモは栽培されているが、中心になる作物は



写真7-6 チパヤ族の鋤。足をかけて踏み鋤のような使い方もする



写真7-7 アサドンと呼ばれるスペイン起源の鋤（ボリビア・チパヤ族）

トウモロコシである。ペルー南部のカライバンバ地方（アヤクーチョ県アプリマック）では、灌漑・犁耕・トウモロコシという農耕技術複合に対し、無灌漑（天水）・踏み鋤・ジャガイモという別の農耕技術複合が見られるとされる〔藤井・友枝 1985: 13〕。こうして見てゆくと、ジャガイモを主作物とする地域では踏み鋤、トウモロコシなどの穀類を主作物とする地域では掘り棒または鋤が使われるという図式がうかびあがってくる（ただし、カライバンバ地方では鋤のかわりに畜力を使った犁が使われている）。それでは、はたしてこの図式は正しいのか。

この問題を検討するためにはトウモロコシの主要な栽培地帯であるアンデス山麓の低地部での伝統的な農具がどのようなものかを知る必要がある。それについてはケロ村とラ・パンパでの例を見たが、これだけの資料ではあまりに断片的すぎる。また、先に述べたようにアンデス山麓の低地部、とくに海岸地帯はスペイン人の侵略によって早い時期に先住民文化が大きな変化を受けたため、そこで本来の農具がどのようなものであったかという問題を現在の民族学的資料から明らかにすることは不可能である。

しかし、幸いなことにペルーの海岸地帯はほとんど降雨を見ない砂漠地帯となっているため、木製の農具も考古学的遺物として比較的多く残っている。さらに、この海岸地帯で出土した土器に表象された農具の図像も資料となる。資料は十分ではないが、今後の見通しを得るためにも、ここでプレインカ期の農具について少し検討しておくことにしたい。



写真7-8 オタバロ（エクアドル）の鋤

## 6 プレインカの農具

アンデスで使われてきた農具の多くは木製品であったようで、考古遺物としては時代がかなり下がってからのものしか出土していない<sup>6)</sup>。ただし、象形土器の図像のなかに農具がでてくる。この土器の図像で最初に農具らしきものが出現してくるのは、紀元数世紀頃にペルー北部および南部海岸地帯で生まれたモチェおよびナスカ文化である。たとえば、図7-11はナスカ文化の土器に描かれたモチーフのひとつで、動物は宗教上で重要なネコ科動物であり、それが手にするのはアンデスでアヒバの名前で知られるイモ類である。そして、もうひとつの手に持つものは掘り棒であると考えられる。おそらく、アヒバのイモを掘り棒で掘りとった様子を表象したのであろう。

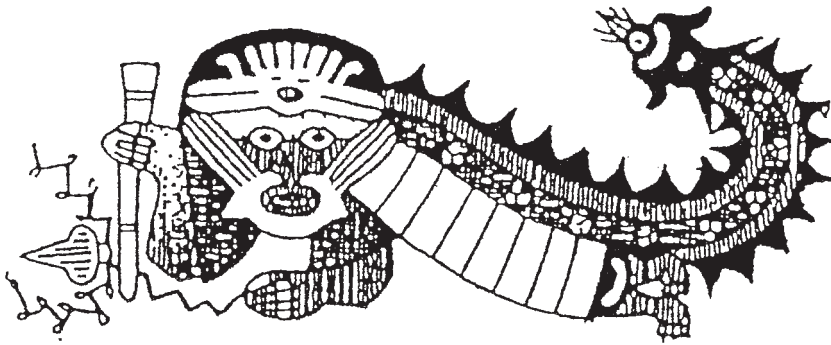


図7-11 イモ類のアヒバとともに掘り棒をもつ動物 [Yacovleff 1933]



写真7-9 ナスカの掘り棒。ペルー国立人類学考古学博物館所蔵



写真7-10 ナスカの掘り棒。ペルー国立人類学考古学博物館所蔵

このほかにも、ナスカ文化の土器には写真7-9や7-10のような掘り棒と考えられる棒をもつ人物が多い。当時、ナスカではアヒバのほか、マニオクやアチラなどのイモ類、さらにトウモロコシやトウガラシなども栽培していたらしいが、土器の図像から見るかぎり農具は掘り棒しか見られない。

同じ頃、ペルー北部のモチェ河谷におこったモチェ文化の土器にも図7-12のような掘り棒と思われる道具をもった人物が見られる。この人物は腰に布袋らしきものをつけ、そこに手をいれている。当時、モチェではトウモロコシや豆類、さらにカボチャなども栽培していたので、袋にはこれらの種子をいれ、掘り棒を使って播種していたのかもしれない。なお、左の2人の人物は口に牙があることから単なる人物ではなく、神性をもった農耕神であったと考えられている。

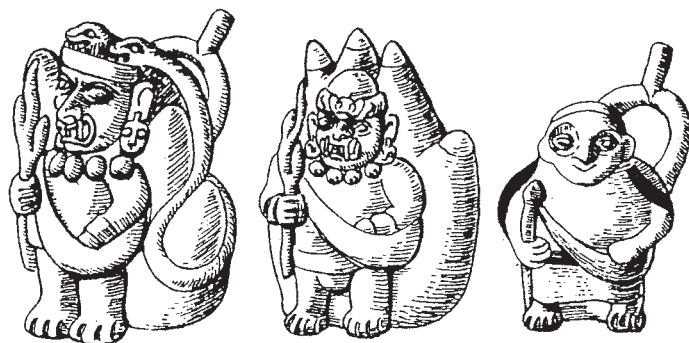


図7-12 モチェ期の土器モチーフに見られる種をまく農耕神 [Carrión Cachot 1959]

しかし、掘り棒はもともとトウモロコシなどの穀物のためではなく、イモ類を掘りおこす道具として発達した可能性がある。先述したように、アメリカ大陸における唯一の穀類といえるものはトウモロコシであるが、それがアンデスで栽培されるようになったのはイモ類よりかなり遅いと判断される。したがって、アンデスではイモ類をもっぱら重要な食糧源にしていた時代が長くつづいたであろう。この時代に掘り棒が使われていたのではないかと考えられるのである。

こうして見てくると、アンデスでも掘り棒で野生のイモを掘り取っていた可能性さえうかがえてくる。とくにアンデス高地ではジャガイモなどが栽培化される前、野生のイモ類を採集利用していた時代が長くつづいたので、これらのイモ類を掘り取る道具として掘り棒が開発された可能性もある。その後、海岸地帯でもアチラやマニオク、サツマイモ、その他のイモ類が栽培されるようになったので、これらのイモ類の植え付けや収穫などにも掘り棒が重要な農具になったと考えられる。

さて、ナスカでも、モチェでも、踏み鋤はもちろん、鋤や鍬も土器の図像には見られない。もちろん、土器に描かれていなかったからといって、これらの農具がなかったとはいえない。実際にナスカやモチェとほぼ同じ頃、ペルー中部におこったニエベリア文化の遺跡からは図7-13のような木製の道具が数多く見られ、図中の解説図のようにして使われた手鍬のような農具であった可能性が高い。いずれにしても、土器の図像に見られる農具が掘り棒だけで、しかも農耕神とともに出現していることなどから見て、少なくとも当時は掘り棒が中心的な農具であったと思われる。

その後、このような農耕神がもつ農具は掘り棒から鋤にかわる。中央アンデスでは、10世紀頃からインカ時代の前まで地方王国期と呼ばれる時代を迎え、各地で王国が生まれていた。そのひとつがペルー北海岸でモチェ文化が衰退したあと、12世紀頃からインカ時代まで栄えていたチム王国であった。このチム文化の土器の図像に鋤が見られる(写真7-11)。この土器の表面には、全体にトウモロコシの穂を様式化した模様が見られ、さらに両手に鋤をもつ人物が見られる。このようなトウモロコシを様式化した図



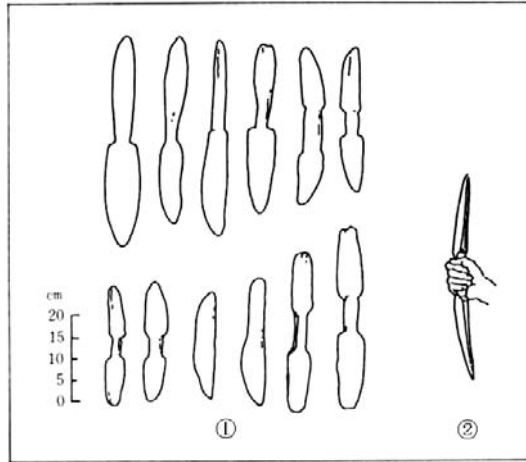


図7-13 ベルー中部海岸のニエベリア文化の遺跡から出土した木器①と使用法② [Muelle 1935]



写真7-11 チムー文化の土器に象られた鋤（ペルー・天野博物館所蔵）

像でおおわれた人物が鋤をもつ土器がほかにも多く見られることから、このタイプの鋤はトウモロコシ栽培と密接な関係をもっていた可能性がある。

正確な年代は不明であるが、先スペイン期の海岸地帯では数多くの木製の鋤も出土している。写真7-12にその一例を示したが、この鋤は形態から見るかぎり先のオタバロ族やチバヤ族の鋤に非常によく似たものであったらしい。この写真の右側の2つは先の図

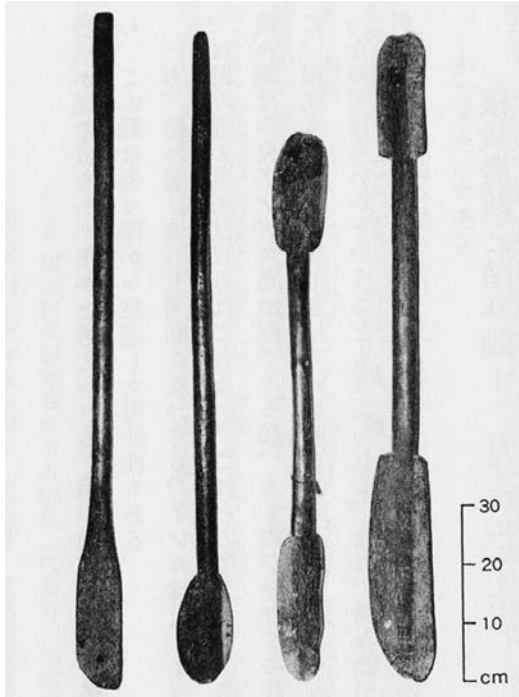


写真7-12 プレインカ時代の木製の鋤  
(ペルー・天野博物館所蔵)

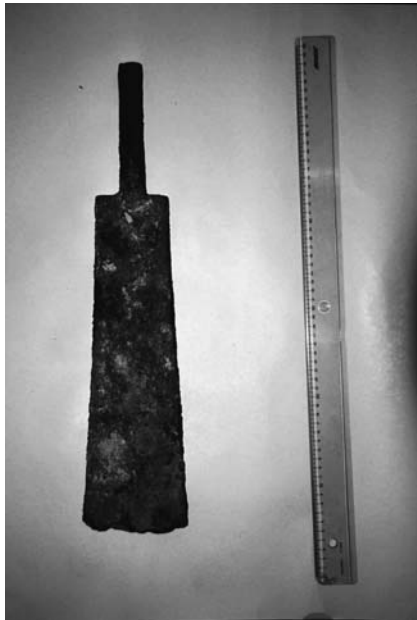


写真7-13 青銅製の刃先を持つチムー時代の鋤  
(ペルー・ラルコ・エレラ博物館所蔵)



7-10に形はよく似ているが、もっと大型で、おそらく鋤のようになって使われたものと考えられる。

興味深いことにチムーで出土した鋤には青銅製の刃先をもつものもある(写真7-13)。チムー以前の時代には金属製の農具はまったく知られていないので、青銅製の鋤の出現は海岸地帯における農耕の大きな発達を物語るものであろう。当初、イモ類栽培のために開発されたと考えられる掘り棒ではあるが、トウモロコシ栽培の発達とともに掘り棒から鋤に発展したのかもしれない。先にトウモロコシは特別な価値をもつ作物であった可能性を指摘したが、青銅製の鋤の存在はこのようなことも物語りそうである。

ただし、鋤の出現によって掘り棒が消えてしまったわけではなく、この時代の海岸地帯では鋤とともに掘り棒も使われていたようである。チムーとほぼ同じ頃、ペルーの中部海岸で栄えたチャンカイ文化でも出土した木製の道具のなかに木製の鋤とともに先端を尖らせた棒が数多く見られる。その先端部は土による使用痕がみとめられるので、これは掘り棒と考えてよいだろう。また、この鋤のなかには上端部に精巧な彫刻をしたものもあり、重要な農具であったことをうかがわせる(図7-14)。

このような2つの異なった農具の併存は、おそらく2つの異なった作物群の存在を物語るものであろう。すなわち、マニオクやアチラなどのイモ類とトウモロコシやマメ類などの種子作物の2種類の作物である。掘り棒はイモ類の栽培や収穫に、トウモロコシなどの種子作物には鋤が使われていたのではないかと考えられるのである。先述したよう

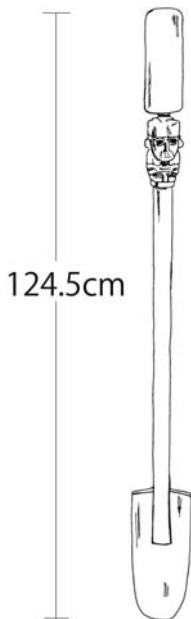


図7-14 チャンカイ文化の鋤  
(ペルー・天野博物館所蔵)



写真7-14 トウモロコシとマニオクを手にする神像の描かれたモチェ文化の土器(ペルー・天野博物館所蔵)

にペルーの海岸地帯では地方発展期あたりからトウモロコシ栽培が拡大してゆくが、2種類の農具の存在はチムーになってもトウモロコシとともにイモ類も重要な作物として栽培していたことを物語りそうである。実際に、モチェヤチムーの土器にはトウモロコシとマニオクを両手にもつ農耕神らしい人物像が少なくないのである（写真7-14）。

とにかく、この時期の海岸地帯では作物の種類によって特殊化した農具がいくつか見られるようになっていたのであろう。そして、トウモロコシ栽培のために特殊化、発達した農具が鋤ではなかったかと考えられる。海岸地帯では地方発展期の主要な農具が掘り棒であったと考えられることから、この鋤は掘り棒から発達した可能性もある。

ここで参考までに、先スペイン期中米の農具も見ておこう。中米の主作物といえはトウモロコシであるが、そのトウモロコシ栽培に独特の農具が使われていたからである。この農具は一般に現地でもコア（coa）の名前で知られ、メスキート（*Prosopis juliflora*）のような固い木でつくられていた。そして、その形態は先端部がとがっていて掘り棒状であるが、鋤のように幅が広がっている部分もあり、この点からは掘り棒と鋤の中間タイプととらえられることもできる。

また、このコアはメキシコでコデックスの名で知られる古絵文書にもしばしば描かれていて、その使用法についてもかなりの程度知ることができる。図7-15は、フロレンティーノ（ca.1570）の古絵文書に描かれたもので、前者はコアを使ってのトウモロコシの播種、後者はコアでのトウモロコシ耕地の除草の様子を示したものである。ただし、古絵文書によれば、コアの使用はトウモロコシ栽培に限定されていたわけではなく、図7-16に見られるようにマゲイの収穫に使われたり、灌漑用水路の整備などにも使われたりしていたようである。

このように、コアはメキシコを含む中米では唯一ともいえる中心的な農具であり、踏み鋤はまったく知られていなかった<sup>7)</sup>。おそらく、中米では古くからトウモロコシやマメ類などの種子作物を中心とする農耕がおこなわれていたせいで、畑を深く掘る農具が必要とされなかったのであろう。この事情は、中央アンデスの海岸地帯でもあまり変わらなかったのではないかと。最初のうちこそ、そこではイモ類なども主作物になっていた可能性があるが、その後はトウモロコシが主作物になったと考えられるからである。実際に、踏み鋤は地方王国期になっても、インカ時代になっても海岸地帯では見られない。また、その後も海岸地帯では踏み鋤の利用は知られていない。

これらの事実および踏み鋤がジャガイモ栽培と密接な関係をもつことなどから、踏み鋤は中央アンデス高地部でイモ類、とくにジャガイモ栽培のために開発された農具であったと考えられる。さらに、現在も踏み鋤が使用されている地域の周辺部で鋤が見られることから、鋤からさらに発達した農具が踏み鋤であったのではないかとすることも考えられる。なお、踏み鋤が山岳地帯でいつ頃から使われはじめたのかは不明であるが、先に述べたように遅くともインカ時代には使われていた。そして、インカ時代、少なくとも



図7-15 コアを使っ  
てのトウモロコシの播種および除草作業  
(フロレンティーノの絵文書より ca. 1570)



図7-16 コアを使っ  
てのマゲイの収穫 (フロレン  
ティーノの絵文書より ca. 1570)



写真7-15 踏み鋤を象ったインカ時  
代の象形土器 (ペルー・  
ラルコ・エレラ博物館所  
蔵)

高地部では踏み鋤が中心的な農具になっていた可能性がある。ポーマの図で踏み鋤がしばしば描かれているだけでなく、土器にも踏み鋤を象ったものが少なくないからである(写真7-15)。

## 7 踏み鋤の分布が意味するもの

こうして見ると、少なくともインカ時代においては海岸地帯で鋤や掘り棒が使われ、その高地部では踏み鋤を中心とする農具が使われていたようだ。そして、この伝統は基本的に現在にまで引き継がれていると考えられる。つまり、両地域における農具の違いは、低地部ではトウモロコシを中心に農耕文化が発達したのに対し、高地部ではジャガイモを中心とするイモ類に基礎をおいた農耕文化が発達したことに求められるのではないか。

中央アンデスにおいて海岸地帯と高地部で使われる農具が違っている理由として、従来、指摘されてきたのは両地域における土壌の性質の違いであった。すなわち、ペルーの海岸地帯の土壌が砂まじりで耕起しやすいのに対し、山岳地帯のそれは硬くて耕起しにくいからであるとする説である。たしかに、このような要因もあるかもしれないが、それがすべてではないであろう。というのも、踏み鋤の使用が山岳地帯の固い土壌のせいであるとするなら、踏み鋤はアンデスの全域で見られてよいはずだからである。

しかし、踏み鋤が見られるのはアンデス全体で見れば、かなりかぎられた地域である。すなわち、アンデスのなかでもその中央部、とくにその中南部高地だけである(図7-17)。この図によれば、踏み鋤は中央アンデスの中南部高地から南北に伝播したことになるが、少なくともペルー北部やエクアドルではまったく見られない。はたして、Gadeら[1972]がいうように本当に踏み鋤が中央アンデスから北部アンデスまで伝播したのかどうか、これも不明である。

では、この踏み鋤の限定された分布域は何を物語るのか。そこは、後述するようにジャガイモ栽培のために休閑システムをとっている地域である。このことから見て、踏み鋤は休閑によって固くなった土壌の耕起を可能にするために開発された農具であると考えるのが妥当なようである。じつは、踏み鋤の開発による効果はジャガイモの植え付けを容易にし、休閑後の土地の耕起を可能にしたのである。さらに、踏み鋤によって掘り棒や鍬などよりはるかに深く耕すことが可能となり、それが土壌中に微生物の活動を良くするために必要な酸素の供給を可能にする。また、踏み鋤を使うことによって高い畝をたてることも可能になり、それによって雨季の水のコントロールや土壌中の湿度の調節もできる。つまり、踏み鋤の開発をとおして土壌のより有効な利用が可能になり、ひいてはジャガイモの生産性を高めることができたのである。

このように踏み鋤の使用は、休閑をとおしてジャガイモの安定的な栽培をはかっただけでなく、その生産性を高める効果ももっていた。じつは、踏み鋤の使用地域はジャガイモの栽培、利用の点できわめて発達した地域のようなのである。先にも指摘したように、中央アンデス高地はジャガイモの倍数性の利用が見られ、しかもそこでは次章で紹介するようにイモ類の加工技術が特異的に発達した地域でもある。この点については、終章

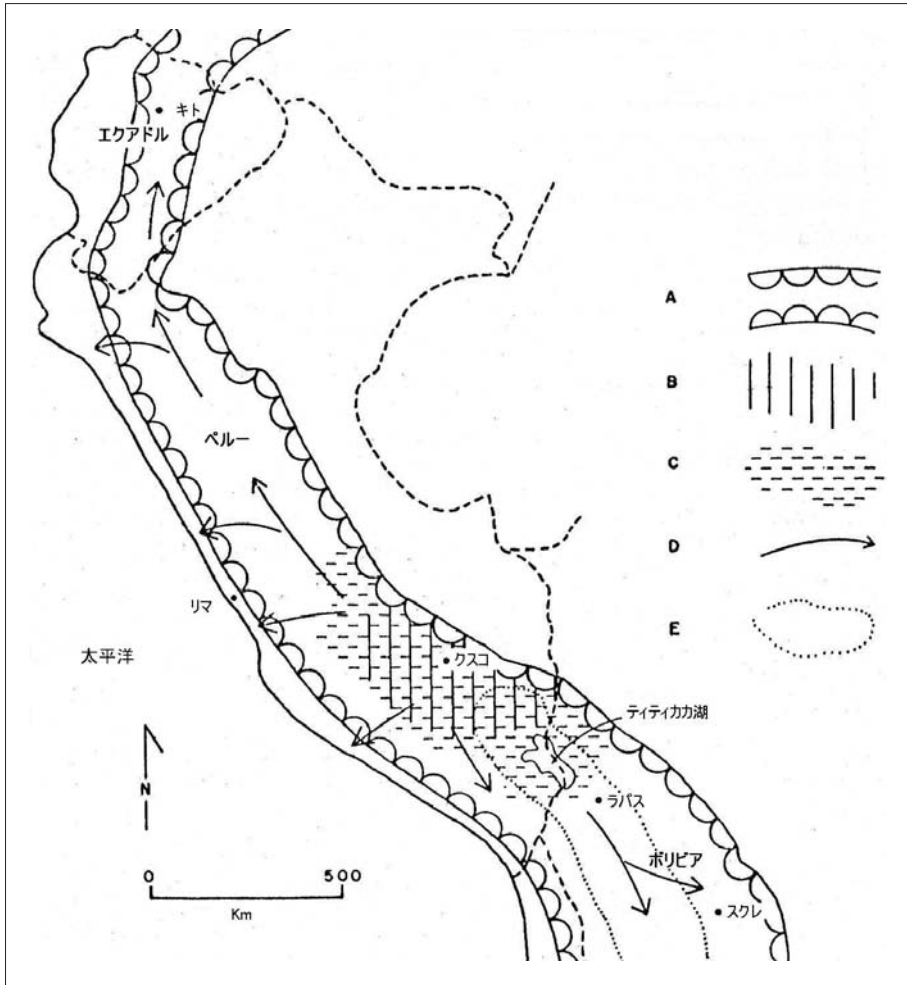


図7-17 踏み鋤の分布および起源地 [Gade 1972] より

- A: アンデス山脈
- B: 踏み鋤の起源地 (推定)
- C: 踏み鋤を重要な農具とする地域
- D: 先スペイン期における伝播の方向
- E: アルティプラノ (標高3800m)

であらためて詳しく検討する。

[付記] 本章の農具の図を描いて下さったのは、堺真理さん (民博元標本資料係)、中村ひさ子さん (民博標本整備係)、溝口のぞみさん (大阪外国語大学大学院生) の皆さんである (所属は、いずれも当時)。お名前を記して謝意を表しておきたい。



## 注

- 1) Cobo もインカ時代のタクヤ *tacla* と呼ばれる踏み鋤について同様の記述をしている [Cobo 1979 (1653): 213]。
- 2) アンデスの踏み鋤を詳しく調査した Rivero Luque [1987] は、主として柄の部分の形態および構造によって5つのタイプに分類している。
- 3) 主としてボリビア領の高原地帯に住むアイマラ族の土砕きは、先端部に石がつけられ、この部分で土を砕いているとされるが [Tschopik 1946: 515-516]、これが書かれたのは1944年以前のことなので、現在はもう見られない可能性がある。
- 4) この踏み鋤の分布は、植民地期には北はエクアドルまで、南はボリビアでも使われるようになっていたとされるが [Gade and Rios 1972: 2]、現在のエクアドルではまったく見られない。
- 5) これは、いわゆる不耕起栽培と呼ばれる方法であり、鋤で水分が出てくるまで穴を掘り、そこにキヌアを播種する。このようなシンプルな農法と鋤の利用は密接な関係がありそうである。
- 6) 石器を使った農具もあった可能性があるが、所蔵している博物館では整理が悪く、分析もほとんど進められていないため、本稿では取り扱わなかった。
- 7) コデックスの中にコアに足をかけ、踏み鋤のようにして使っているものが見られるが、これはスペイン人たちによる征服後の変化であると考えられている [Donkin 1979: 9]。